

子どものインテリア行為の発達と母親の関わりに関する研究

住まいにおける子どものインテリア行為と母親の関わりに関する研究その1

近藤 雅之^{*}, 片山 勢津子^{**}, 中村 孝之^{*}

Development of Interior Behaviors of Children and Influence of Their Mother's Empowerments

Interior Behaviors of Children and Influence of Their Mothers Empowerments Part 1

KONDO Masayuki, KATAYAMA Setsuko, NAKAMURA Takayuki

1. はじめに

快適で満足度の高い居住空間を形作るためには、自己のライフスタイルに合わせて空間を自己化する「インテリア行為」¹⁾する力を身につけることが望ましい。子どもの頃に、子ども自身が子ども部屋のインテリアとどのように関わるかが、その力の獲得に重要な役割を果たすと考えられる。しかし、現実には7割の家庭で母親が子ども部屋の管理に関与している²⁾。そのような状況下で、「インテリア行為」する力はどのように形成されるのだろうか。また、親の関わりの影響はあるのだろうか。

本報では子どもの自立過程におけるインテリア行為に着目し、子どものインテリア行為の学齢変化、および子どものインテリア行為に対する母親の関わり方を調査し、いかにすれば子どものインテリア行為する力が向上するかを明らかにすることを目的とし、ヒアリング調査およびアンケート調査から得られた結果を元に考察する。

2. 方法

2.1 ヒアリング調査

小学生の子供を持つ家庭を訪問して、母親に対するヒアリングを行った。被験者は30名、質問項目は子どもの居場所（普段よくいる場所、友達が来たときいる場所）、就寝状況（場所、寝具、就寝形態）、子ども部屋の状況（設置時期と理由、家具）、学習機の状況（設置時期、選択者、行為）、持ち物の場所、学習機周りのインテリア行為などである。ヒアリングは約1時間で、平成18年7月～9月に行った。被験者の子ども数は59名、うち小学生は42名（男子15名、女子27名）で、学年別では1年7名、2年9名、3年6名、4年9名、5年6名、6年5名である。住居形態は独立住宅21軒、集合住宅9軒である。

2.2 アンケート調査

ヒアリング調査による結果をもとに、定量調査を行った。対象は幼児期前期（2歳）から高校生までの子どもを持つ核家族世帯で、調査会社の登録モニターに調査票を配布回収した。回答者は母親591名で、平均年齢37.1歳、平均子ども数1.95人、調査対象の子どもは1066人であった。調査地域は大阪、京都、兵庫、奈良で、無作為抽出した。調査期間は平成18年11月24日から2週間である。

3. 結果と考察

3.1 ヒアリング調査

（1）インテリア行為の状況について

子ども部屋の観察とヒアリングから、表1のような子どものインテリア行為を確認した。

子どもの学齢によって実施される行為に違いが見られた。学齢が低い場合は「自分の作品などを飾る」などの目に見える行為が多く、学齢が高い場合は「カーテンなど子ども部屋の模様替えをする」などの想像力が必要な行為が多く見られた。

表1 子どものインテリア行為(ヒアリング調査)

・学習机や棚に小物を並べる	・子ども部屋の家具配置を変える
・自分の作品などを貼る	・カーテンなど子ども部屋の模様替えをする
・ポスターや小物の配置や種類を変える	・カーテンや家具を自分で選ぶ
・部屋に飾るものを欲しが	・子ども部屋用のお店などに探しにいく
・部屋に飾るものを作る	

（2）子どものインテリア行為に対する母親の関わり方

ヒアリングの結果、母親のインテリアへの関わり方を、考える主体と行動する主体によって「子ども中心型」「共同作業型」「母親中心型」「無関心型」の4つに類型化した（表2）。母親の関わり方が、子どもの自主的な思考や行動を尊重した「子ども中心型」「共同作業型」の場合、家庭内で子どものインテリア行為が多く見られるが、母親が子どもの意志を無視した「母親中心型」やインテリアに無関心である「無関心型」の場合は、子どもの自発的なインテリア行為があまり見られなかった。このことから、母親の関わり方が、子どものインテリア行為のモチベーションに影響を与えていることが推測された。

表2 インテリア行為への母親の関わり

考える主体	行動する主体	分類型名	特徴
子	子	子ども中心型	子どもの自由にまかせており、母親はインテリア行為が促されるように子どもに積極的に働きかける。
子	母・子	共同作業型	子どもの意見をよく聞き、選択権を与えて、子どもと一緒に行動。
母	母	母親中心型	子どもが喜ぶと考えて母親が行うが子どもは関与していない。美しく整っていることが多い。
子	子	無関心型	子どもの自由にまかせており、母親はあまり関わらない。雑然としている場合が多い。

3.2 アンケート調査

（1）片づけ行為とインテリア行為の関係

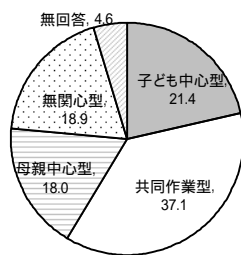
まず、インテリア行為に結びつく基本行為として片づけ行為を調査した。何らかの自分の持ち物を片づけている子どもは81.8%である。しかし、自分から進んで片づけるのは20.1%であり、親から言われなければ片づけをしないのは72.3%であった。

次に、子ども自身がしているインテリア行為を学齢別に見ると、「学習机や棚に好みの小物を並べる」「ポスター・小物の配置や種類を変える」のは小学校低学年から、「部屋に飾る物をほしがる」のは小学校高学年から、「自分で店に探しに行く・模様替えをする」のは中学生から、「カーテンや家具を自分で選ぶ」のは高校生から、それぞれ行為率が伸びてくる。(図2)

ここで片づけ行為ができる子どものうち、自ら進んでする群を「片づけ力・高」、親に言われてやる群を「片づけ力・低」、自分では片づけをしない群を「片づけ力・なし」と分類し、片づけ行為とインテリア行為の連関について考察した。片づけ力が高いほど、各インテリア行為率が高く(図3)、その傾向はほとんどの学齢に於いて当てはまった(図4)。高校生で、片づけ力なしが片づけ力低を上回っていたが理由は不明である。

(2) 母親の関わり方とインテリア行為の関係

ヒアリング調査で分類した、4種類の子どものインテリア行為に対する母親の関わり方の構成比率は図5のようになり、共同作業型の母親が最も多かった。



学齢で見た子どものインテリア行為率の変化は、母親の関わり方によって差異が見られた。「学習机や棚に好みの小物を並べる」行為を例に挙げて特徴を述べる(図6)。母親の関わり方が「子ども中心型」の場合、就学前であっても子どものインテリア行為率は37.5~50%と他に比べて高く、就学後は80%以上を推移する。「共同作業型」の場合、就学前は行為率が14.5~33%であるが、小学校中学年以降は行為率が80%以上を推移する。「母親中心型」の場合、就学前の行為率は8.9~14.6%と低く、就学後に60%程度まで増加するが中学生以降は再び低減していく。「無関心型」の場合、就学前は行為率が最も低く、就学後も50%台で推移する。ただし、中学生以降も行為率の低減は見られず「母親中心型」と逆転する。これらの結果から、ヒアリング調査の状況が裏付けられたことに加えて、子どもが主体的にインテリア行為を行い母親がそのサポートをすることは、子どものインテリア行為する力を伸ばす可能性があり、一方、母親が主体的に考えて子ども部屋のインテリアに関わることは、子どもの自主的なインテリア行為の発現を抑制する危険性があることが示唆された。

4. まとめ

1. インテリア行為は、子どもの学齢が上がるにつれてその内容が変化していく。
2. 片づけを自発的にする力とインテリア行為する力は連関がある可能性がある。
3. 子どものインテリア行為に対する母親の関わり方により、子

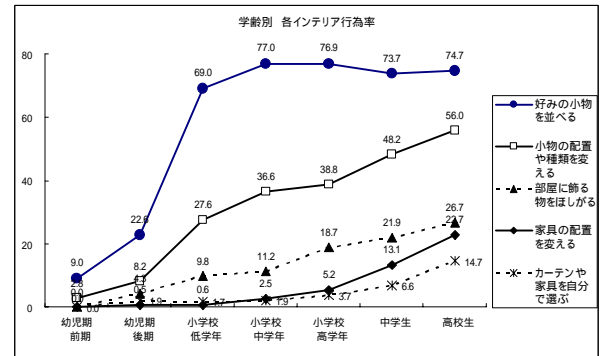


図2 学齢別 インテリア行為率

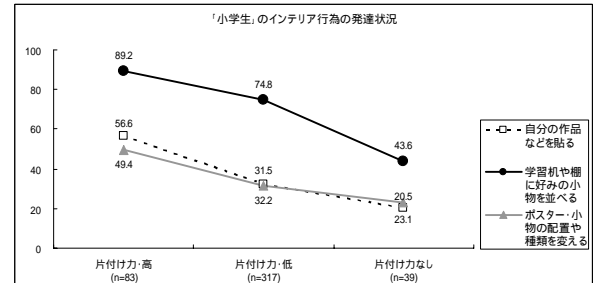


図3 小学生のインテリア行為発達状況

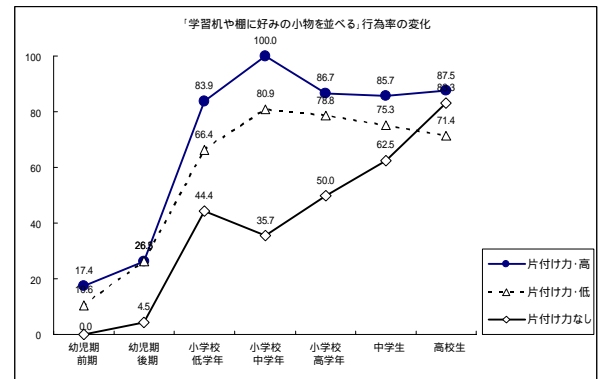


図4 片づけ力別「学習机や棚に好みの小物を並べる」行為率の変化

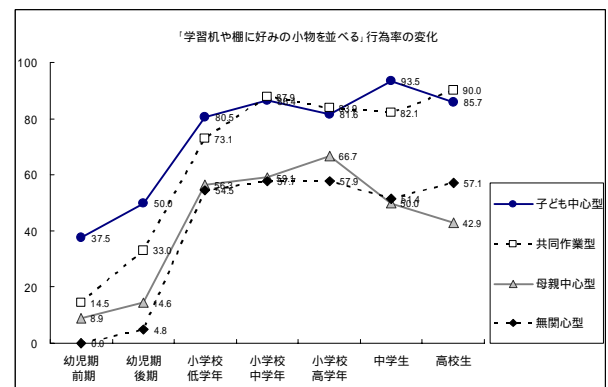


図6 母親の関わり方別「学習机や棚に好みの小物を並べる」行為率の変化

どものインテリア行為する力の形成に差が出る。

今後は、母親の価値観・育児観を切り口とした検討を行い、子どものインテリア行為する力にどのように影響を与えるのかについて考察していくことが必要と考える。

(* 積水ハウス・** 京都女子大学)

- 1) 松田&加藤 「インテリアのこだわり意識と自己実現欲求に関する調査研究」日本インテリア学会第9回大会研究論文梗概集平成9年10月 P4-5
- 2) 北浦かほる『世界の子ども部屋 子どもの自立と空間の役割・文化にはめ込まれている子どもの自立と子ども部屋という空間』井上書院 2004年3月